

〔原 著〕

多声的な物語としての家族の理解 —“地図や鉄道へのこだわり” についての家族ひとりひとりの物語—

山本 真実¹⁾

要 旨

本稿の目的は、こだわりとも理解されるひとつのことにに向けた関心を、家族ひとりひとりの物語として記述することによって、家族のあいだの理解を多義的に提示するとともに、多声的な物語として家族を理解していく意義を提案することである。ひとつの出来事には多声的な意味があるとするナラティブに依拠し、ある家族を取り上げ、質的記述的研究を行った。

ひとつのことにに向けた関心である地図・鉄道についてのやりとりは、子どもにとっては、楽しみや感動を共有しながら、相手への合わせ方を学ぶ物語であり、母親にとっては、節度を教えながら、納得できる子どもの理解を探る物語であり、父親にとっては、対等に話し合いながら、子どもの生き方を家族で考えていく物語として語られた。家族には多声的な物語があり、地図・鉄道について語ることは、家族ひとりひとりが、相手の想いを汲み取りながら自分の家族について語ることによって、家族としての物語をつくっていくことであった。家族ひとりひとりの物語は、互いに補完的であり、物語同士は関わり合いながら語られた。

多声的な物語として家族を理解することは、問題を解決するという物語からのみでなく、家族の物語が多様であることがどのように家族を支え、物語の重なり合いに家族としてのどのような考えがあるのか、という物語と物語の円環的な視点から家族を理解することを促す。

キーワードズ：ナラティブ、対話、多声性、羅生門的現実、自閉症スペクトラム

1. 緒 言

1. 背景と問題の所在

本稿では、こだわりとしても理解されるひとつのことにに向けた関心を、家族ひとりひとりの語りとして記述し、家族のあいだの理解を多義的に提示する。そして、物語が重なり合う多声性として家族というひとつのユニットを理解することに取り組む。子ども達は、成長発達の過程で同じことを何度も繰り返しながら、自分の周りの世界や物事と自分との関係を学んでいく。しかし関心が狭くて偏りがちであることや、繰り返す行動が、子どもあるいは家族の日常生活に影響し何かしらの苦勞となるとき、そ

れはこだわりといった問題行動として理解される。こだわりは、コミュニケーションの障がいとされる自閉症スペクトラム (ASD: Autism Spectrum Disorder) の特徴でもあり、DSM-5においても、同一性へのこだわりは診断基準のひとつとして示されている (十一, 2014; 宮川, 2014)。こだわりは、看護活動においてもよく出会う出来事である。手をひらひらさせる行動、ルールの遵守、同じ話題に特化したやりとり、特定の食品や商品だけを好むなど、その様相は様々である。こうした行動には子どもなりの理由があるとされ、不安や負担の軽減 (海老名, 齊藤, 2005; 奥村, 2001)、自分を満たすため (海老名, 齊藤, 2005)、あるいは強迫症状の可能性 (宇佐美, 2014) が報告されている。他者への攻撃

1) 岐阜県立看護大学

行動、自傷、パニックといった二次障害につながる(渡辺, 金生, 2014)という指摘, そして食事の問題(佐久間, 廣瀬, 藤田他, 2013; 高橋, 大岡, 内海他, 2012; 小島, 谷田, 屋敷他, 2008)という育児上の困難さとして報告されたものもいくつかある。ASDのある人々自身は, こだわりとされる行動の理由について, 刺激を気持ちの良い程度で取り入れるため, 愉快さ, 何度も聞いてフレーズを記憶したため(東田, 2007)と述べており, こだわりの後には, 過度な集中による極度の疲労感がある(難波, 2016)とも記載している。こだわりは, 子ども達にとって, 心理的な安定, 心地よさ, 楽しみとして語られ, 一方では, 疲労や他者との関係のトラブルといった困難さとしても語られている。こうしたこだわりへの対応としては, 見守るといった受容的な対応(難波, 2016; 海老名, 齊藤, 2005; 奥村, 2001)が挙げられるものの, こだわりによって生活への支障が生じることも少なくはなく, 時間を決める, 見通しをもつというソーシャルスキルを育てること(本田, 日戸, 2016), 初めての経験では不快な刺激を軽減する(小島, 谷田, 屋敷他, 2008)などこだわりに柔軟さをもたせていくことが提案されている。以上のように, こだわりともされるひとつのことに向けた関心は, 様々な見方から理解されており, 特に支援の対象という文脈では, 改善を要することや困り事として語られている。

では複数の人々が構成する家族においては, ひとつのことに向けた関心は, どのような物語として, つまり出来事と出来事が関連づけられた文脈として理解されているのだろうか。対話という相互作用においては, ひとりひとりが主体であり, それぞれの語りが複数の声として重なり合い多声的(ポリフォニック)である。家族ひとりひとりが語る主体であり, ひとつの事象に複数の物語が混在するならば, ひとつのことに向けた関心は, 家族の中では困り事や問題という物語としてだけではなく, 多様な物語として理解されているのではないだろうか。多様な物語の重なり合いである多声性として家族を理解す

ることは, 家族の有り様を知るアプローチとなり得る。

2. 目的

本稿の目的は, ひとつのことに向けた関心を家族ひとりひとりの物語として記述することによって, 家族のあいだの理解を多義的に提示するとともに, 多声的な物語として家族を理解していく意義を提案することである。

本稿に取り組む意義として, 第1に, ひとつのことに向けた関心が, 家族のあいだでどのような意味をもつのかを知ることができ, 対話という支援を充実できることがある。第2に, 家族の多様な物語として出来事を眺めることで, 支援者自身が, これまでの理解の仕方を問い直す機会や, 対話における支援者の姿勢について考える機会を得られることがある。第3に, 家族ひとりひとりの物語の重なり合いという見方から家族というユニットを理解する方法の検討に役立つことがある。

本稿は, コミュニケーションの困難さを抱える子どもと家族の語りからその子を理解すること, そして多様な意味が生じる対話の意義を検討することを目的とした研究の一部である。ひとつのことに向けた関心という子どもの特徴を取り上げる理由は, 本研究に参加した子ども達には, ある特定の話題について, 生き生きと語る子どもが複数おり, ひとつのことに向けた関心を語ることは, 子ども達にとって重要であると考えたことが挙げられる。そして, ひとつのことに向けた関心による対話は, 家族のあいだでは日常的に行われているものであり, 家族という相互作用によってつくられる幅広い意味の世界を学ぶことができると考えたためである。

II. 理論的視座

本研究は, 対話によって人々が創る意味の社会システムから物事を捉えるナラティブに依拠する。ナラティブとは, 語りであり, 語られる物語である(野口, 2002)とされ, また語り合うその関係性を

も含めた言葉である。対話によって出来事と出来事をつながりである物語がつくられ、対話という相互作用の中で、これまで当たり前だったドミナントな物語が、オルタナティブな物語に書き換えられていくと考えている。

ナラティブでは、世界がまずあってそれが言葉で表現されるのではなく、言葉が先にある、その言葉が差し示すようなかたちで世界が経験される（野村, 2002）と考えており、こうした考え方を社会構成主義という。社会構成主義において、現実とは、「人々のあいだのコミュニケーションと社会的交流を通してダイナミックに創り上げられる複数の意味（Anderson, Goolishian, 野村, 2013）」であるとする。つまり本稿が目指すひとつのことに向けた関心には、困難さや問題という現実もあれば、異なる現実も存在しており、多様な現実が対話の中にある。

こうした多様な現実とは、「羅生門的現実（Rashomon-like reality）」（野村, 1999）としても提案され、「われわれの関与する世界は常に複数の現実が交差し交渉される場」（野村, 1999）であるとされる。またアーサー・クライマン（Kleinman／江口, 五木田, 上野, 1996）は、生活や人生と一体となった病いの意味を理解すること（野村, 1999）に注目し、疾患とは根本的に異なる病いという見方から、病いの経験や病いの出来事は常に複数の意味を表し、多義的ないし多声的であるとした。ひとつのことに向けた関心には、参与するひとりひとりの生活や人生と一体となった社会的現実があり、いくつもの社会的現実が重なり合って多声的な世界をつくる。

本稿では、多声的な物語として家族を理解することに取り組む。本稿において対話とは、お互いが影響し合いながら意味を追っていくことと考える。対話とは、意味を見出し理解しようとする努力（Anderson, Goolishian, 野村, 2013）であるとされるように、言葉を交わすことが重要なのではなく、そのやりとりが非言語的、あるいは雰囲気共有であっ

ても、何かしら新たな意味が生じる可能性を信じ、互いに意味を理解しようとする関係性があることが重要となる。また対話において理解の途上にとどまり、互いに意味を理解しようとし続ける姿勢をナラティブでは無知の姿勢（Anderson, Goolishian／野村, 1997）と呼ぶ。無知の姿勢とは、相手にとっての現実是对話の中で創られていくと考え、対話を通してその人が生きる社会的現実を理解しようとする姿勢であり、相手を理解しようとする関心を持ち続けることである。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本稿は、ひとつの家族を取り上げた質的記述的研究である。ひとつのことに向けた関心が、家族ひとりひとりにとってどのような物語として語られるのかを、家族員と著者との対話により明らかにする。物語とは、出来事をつづり、それらをつなげた筋立て（森岡, 2009）であり、2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為（やまだ, 2000）であるとされる。本稿においても物語とは、出来事をつなげた筋立てと考える。それぞれの家族員の物語は、家族内の相互作用の影響を受けており、そして複数の構成員からなる家族の相互作用は複雑に絡み合う。家族の多様な物語を理解するためには、あるひとつの家族に注目したケーススタディに取り組み、それぞれの家族員の物語と、物語と物語の重なり合いを丁寧に理解しようと努めることが求められる。

ケーススタディにおける研究者の目標は、理論を拡張し一般化することであり、頻度を列挙することではない（Yin／近藤, 2011）とされ、相互作用の文脈で生じる事象を記述し検討を行い、何かしらの新しい知見を抽出する（山本, 2001）こととされる。本稿においても、家族による違いやバリエーションの多様さを明らかにするのではなく、あるひとつの家族における物語の有り様を記述することから、家族という相互作用における複数の物語を理解するこ

とを試みる。そして看護活動において、多声的な物語として家族を理解する意義を考えていく。そのため本稿で取り上げる家族は、母集団を代表する標本としてではなく、自明視されてきた知識や実践を、オルタナティブな物語として理解することを教えてもらうケースとして扱う。

単一ケースの選択論拠としては、理論を確証し拡大するための条件を満たす決定的なケース、極めて稀にしか見られないユニークなケース、これまで研究されていない現象を観察・分析する新事実のケースの3つが挙げられている (Yin/近藤, 2011)。事例を通して多声的な物語としての理解を学ぼうとする本稿においては、家族の物語の有り様を学ぶことができる決定的なケースを取り上げることが必要である。選択される事例は、問題の本質を最もあらわにしている事例 (山本, 2001) とされ、事例の代表性は問題ではなく、事例の内的なダイナミクスを理解すること (内田, 2013) が重視されることから、家族全員が、ひとつのことに向けた関心について何かしらの形で関わり、日常的に話題となっている家族を取り上げる。

2. データ収集方法

研究参加者のリクルートは、成長発達上の課題を抱える子どもとその親が集い活動するサークルで行った。データは、それぞれの家族員と著者 (以下、私とする) との対話により収集した。データ収集の手順は以下の通りである。まず子どもが語る自分自身について知るために、子どもと私の対話を行った。子どもとの対話では、その日、子どもが話したいことを自由に語ることにした。その後、家族から見たその子がどのように語られるのかを知るために、母と私の対話、父と私の対話を行った。母と私の対話、父と私の対話では、子どもと私の対話のうち、子どもが、母や父に話しても良いとした内容と、私が解釈した子どもの物語を伝え、感想や考えを尋ねた。また母や父に、日常生活における子どもとの関わり、子どもとの関わりについての想いや考え、それにまつわる過去の出来事についても尋ね

た。子どもと私の2回の対話、母と私の対話、父と私の対話は、約1ヶ月間隔で実施した。子どもと私の対話は、家族の自宅のリビングで行い、少し離れたキッチンに母か父がいることもあった。母と私の対話は家族の自宅のリビングで、父と私の対話は父の職場近くの貸会議室で行い、どちらの対話でも対話の場に居合わせた他者はいなかった。対話では、無知の姿勢を心がけ、私から尋ねたいことがある時は、対話の流れを止めないよう配慮し尋ねた。各家族員との対話は、了解を得た上でICレコーダーに録音し、速やかに逐語化した。また対話時の状況、対話の雰囲気、対話における相手の動作や表情、対話において私が感じたことは、対話の直後にメモを取り、速やかに文章化して対話の記録とした。対話の記録は、フィールドノート作成時の留意点である、参与観察後に印象をメモすること、観察の記載と研究者の解釈を区別すること、そして進行中の調査プロセスを反省し記録すること、フィールドワークにおける問題や課題を記述すること (Flick/小田, 山本, 春日他, 2002) を参考に記載した。

3. データ分析方法

本稿が明らかにする物語とは、出来事をつなげた筋立てである。そして、家族ひとりひとりの物語は、家族の相互作用に生じるため、家族システムと家族サブシステム (Friedman/野嶋, 1993) に注目した。また本稿が取り上げる家族では、子どもとの対話の大部分は地図・鉄道についての話題であり、母と私の対話、父と私の対話においても、地図・鉄道に関する語りが話題の中心となった。そのため、子どもと母、子どもと父、父と母、子どもと母と父のあいだで行われる地図・鉄道に関心を向けたやりとりと、そのやりとりにまつわる語りに注目することとした。

分析は、家族員ごとに行った。逐語録および対話の記録から、地図・鉄道に関心を向けたやりとりが、その家族員にとってどのような意味として語られるのかを解釈した。逐語化した語りを話題と語りの区切りによって分け、類似性と相違性を継続比較

し、意味のまとまりとして整理した。意味のまとまりとして集められた語りを読み返し、それらが何を語っているのか、その本質が表されるように、意味のまとまりにカテゴリー名をつけた。その後、カテゴリーを俯瞰し、再度、語られた順番に並べるなどして、私との対話において、地図・鉄道に関心を向けたやりとりがどのような筋立ての物語として語られているのかを解釈した。そして逐語録と対話の記録から、語りの意味を表す代表的な語りを選んで文章化し、家族ひとりひとりの物語を記述した。このように記述した家族ひとりひとりの物語について、カテゴリーと物語全体が網羅されるように留意し、どのような物語であるかを一言で表した。

データの厳密性 (rigor) の確保のため以下を行った。対話における語りの内容や分析結果を、子ども、母、父それぞれに伝え、違和感や経験との相違について意見を求めるなどして修正した。また分析過程において、看護学研究者や看護学専攻の大学院生とのディスカッションの機会をもち、分析の視野を広げるよう努めた。

4. 倫理的配慮

研究の説明と依頼では、まず母に、研究の目的、研究方法、研究参加や参加中断の自由、匿名化の方法とプライバシー保護の方法、研究参加による利益と不利益について、書面を用いて口頭で説明し、研究参加への同意と、子どもへの研究説明の承諾を得た。子どもへの説明は、母の同席のもと行い、研究の主旨について、子どもに分かりやすい文章で記載した書面を用いて口頭で説明し、研究参加への同意を得た。父への研究説明と研究参加の依頼は、母と同様の内容と方法にて行い、研究参加への同意を得た。子どもと私の対話への親の同席や参加の仕方は、子どもの希望に添って実施した。

本研究は、岐阜県立看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号0101)。なお子どもの名前は仮名であり、建物や駅の名称などは代名詞や記号に置き換えた。

IV. 結果

1. 家族の紹介

本稿で取り上げる家族は、子ども (翔太君, 8歳) と父 (39歳), 母 (37歳) の核家族である。翔太君が2歳の頃、両親は、翔太君のことばの遅れを心配し、相談のため翔太君を連れて保健センターを訪ねた。夫婦で話し合い、「今できることはなんでもしよう」と決め、療育教室に参加し、また児童相談所の発達相談を受け、医療機関を受診した。2歳6か月を過ぎた頃、翔太君は広汎性発達障がいと診断を受けた。小学校入学時は、遠足などで鉄道に関する展示を見るとその場を離れられないことがあったが、「また家族でゆっくり見に来よう」と事前に約束することで集団行動ができるようになっていった。翔太君は、小学校入学時から普通学級に在籍しており、学習内容は概ね理解していた。しかし、書くことが苦手な授業中に机の上にノートを出さないことや、苦手な教科では離席し、教室から出ていくなどの問題が生じていた。友達の輪の中に入れないことも多くあったが、電車が好きな友達とは話すこともあった。

母は、療育教室や学校でのボランティアをしていた。育児や家事は主に母が行っており、父も育児に協力的であった。父は新聞記者であり、日々、公共交通機関を利用し取材に出かけていた。父と翔太君は半年に1回開催される、鉄道の駅を廻るスタンプラリーに参加していた。このスタンプラリーは翔太君が4歳の頃、父が翔太君を誘ったことで始まり、翔太君も参加したいということで継続していた。また父と翔太君には、父の帰宅時に毎日行う「今日はどこへ行ったでしょう?」という問いかけで始まる対話があった。夫婦は、子育てにおいて大事なことは話し合って決めていた。また両親は、翔太君が、将来、好きなことややりたいことを見つけ、自立していくことを願っていた。翔太君の誕生日には、翔太君が行きたい所に家族で出かけることにしており、この年は、温泉地に家族旅行に出かけた。そし

て翔太君は、その道中、トンネル通過時に誕生日のお祝いをするという誕生会の計画を立てていた。

私は、両親と翔太君が保健センターを訪れたとき、地区担当保健師として家族と出会い相談を受けた。そして私は翔太君が入園するまでのあいだ、翔太君の発達を母と確認し、子育てについて話し合っていた。入園後は、年1回程度、療育教室やサークル活動にて母から近況を聴くという間柄であった。

2. 家族の多声的な物語

翔太君と私の対話は1回目76分、2回目92分であり、母と私の対話は100分、父と私の対話は93分であった。以下に、翔太君、母、父が語った物語を記す。意味のまとまりにつけたカテゴリーは【】、逐語録や対話の記録をそのまま記述した箇所は「」で表す。（）は、語りの意味が読み取れるように補った言葉などである。対話と物語の概要は表1に示す。

1) 翔太君の物語：楽しみや感動を共有しながら、相手への合わせ方を学んでいく物語

翔太君と私の対話は、地図や鉄道の話題が大部分を占めた。翔太君は「僕、乗り鉄。」と言い、スタンプラリーがきっかけで鉄道が好きになったと話した。翌々日に予定されていた父とのスタンプラリーを前に、翔太君は、駅によって異なるスタンプの配置時間を確認しながら、何時に出発し、どのような経路で駅を廻るのかと綿密な計画を立てており、「この駅は一番最後に押す。」と指差して話した。しばらくの間、駅の廻り方を話し合うと、翔太君は、今度は地図帳を広げて「ちなみに地図に戻ると、これが〇〇線ね。A駅って書いてあるでしょ？B駅を超えて、C駅を超えて。」と地図を指差しながら経路を説明した。私は翔太君と話しながら、翔太君の楽しみ方が徐々にわかってきた。そこで、道順を辿ったり、時刻表を見て乗り換えを計画することが楽しいのかと翔太君に尋ねた。翔太君は、大きな声で「うん！」と答えた。翔太君にとって地図・鉄道のやりとりは、【計画づくりを一緒に楽しむこと】であった。また翔太君は、橋の名前と通りの名前が

一致していることなど、私に地図のなかの発見を教えてくださいることがあり、また3つの県の県境がある公園など何か新しい発見があった時には、とても嬉しそうに笑った。地図・鉄道のやりとりは、翔太君にとって【地図のなかにある発見を一緒に探す遊び】でもあった。

2回目の対話のはじめに、私は「今日は何の話をしてしようか」と翔太君に尋ねた。翔太君は、先日行った家族旅行について話し始めた。地図、温泉マップとトロッコ列車の時刻表を見ながら、その日のスケジュールを教えてくれた。トロッコ列車乗車時に見た猿用の橋について、翔太君は「これ猿用（の橋）なんだよ。人間はさ、おっこっちゃうんだよねー。でも優しいなって思った。」と話した。私が「この橋があって優しいなって思ったの？」と尋ねると、翔太君は「人間が作ったから。それは人の思いやりとか。」と言葉を探すように感想を語った。翔太君との対話を通じ、私は、「（翔太君は）地図・鉄道について話しているけれど、その場所での思い出を話しているようにも感じる。地図・鉄道について話すことは、対話のツールなのではないか（2014.9.21の対話の記録）」と感じた。後日（2014.12.11）、私は父にこの感想を伝えた。父は同意し、「（乗った電車や行ったことを）場所とかに絡めて記憶している気がしますね」と語った。また母は、家族旅行についての翔太君と私の対話を聞いた感想として、翔太君が凄いでしょ！と話したことに、私が凄いな！と応じたやりとりが、翔太君としては嬉しかったのだろうと話した。そして、それは「共感（される嬉しさ）ですよ？」と語った。翔太君にとって、地図・鉄道のやりとりは、【地図上に散りばめられた思い出を共感し合うこと】であった。

地図・鉄道のやりとりは、翔太君にとって、気持ちを切り替え、我慢することでもあった。翔太君が楽しみにしていたトンネルでの誕生会について尋ねると、翔太君は、「助手席を倒して、そこを机にして、ケーキを置いて、（ろうそくを）吹こうと思っ

た。日本で二番目に長いトンネル。でも出来なかった。ので、(車の) なかでおにぎり食べた。」と話した。母と父の語りから、この誕生会は、翔太君が、誕生会の計画の変更を受け入れ、車内で可能な範囲で行われたことがわかった。地図・鉄道のやりとりは、翔太君にとって、思い通りに何でもできることではなく、【自分の気持ちに折り合いをつけながら楽しむこと】でもあった。

翔太君との地図・鉄道のやりとりは、地図や時刻表を用いることによって、嬉しい出来事や楽しかった思い出が語られ、他者と共有できる物語となった。地図・鉄道のやりとりは、地図上に散りばめられた思い出や感動を相手と共有しながら、折り合い方を学んでいく物語として語られていた。

2) 母の物語：節度を教えながら、納得できる翔太君の理解を探していく物語

母は、地図・鉄道のやりとりについて「電車の話しはお父さんとねって言うてるんで、私にはあんまり話さない。それにつきあっちゃうと、それこそ止まらないので、私にはあんまりしなないです。」と語った。また母は、「うちは主人が聞いてくれてるから、主人に任せてとは思ってるんですけど、好きなこととかを沢山話せたりとかすると、本人もスッキリするだろうし、楽しかったりするのかなって、今思ったりしました。」と語った。地図や鉄道のやりとりは、母にとっては、適度に切り上げ【はじめを教えること】であり、それは父と翔太君との対話があるからこそ成り立つものとして語られた。

また母は、地図・鉄道のやりとりを微笑ましく見守ってもいた。母は、私が伝えた私と翔太君の対話の様子を楽しそうに聞き、「(地図や鉄道の) 何が面白いんだろうね。いやーわからんなあ。」と朗らかに笑った。地図・鉄道のやりとりは、母にとって、何が楽しいかは共感できないものの【生き生きと話す翔太君を可愛らしいと思うこと】でもあった。

トンネルでの誕生会について、母は、翔太君の提案を聞いた時の感想として、「トンネルでやりたいとかって、ちょっと無謀なことを言うもんだから」

「私が怒っちゃうから」と話した。私が、「なぜ翔太君はトンネル内で(お祝いがしたかったの)? このトンネルは長いからですか? 暗いから?」と母に尋ねると、母は「多分、暗いとか、長いとか、全然関係ないと思います。」と答え、トンネル内に県境があり、県境でお祝いをしたかったという翔太君の想いを語った。行われた誕生会は、母が、自分の常識と翔太君の要望の狭間で苛立ちながらも、母自身が許容できる範囲を広げ、翔太君が一番したいことが叶えられるように考えた方法であった。地図や鉄道のやりとりは、母にとって【許容範囲を広げつつ、節度をもって翔太君の要望を叶えていくこと】であった。

誕生会の話から母は、「境目が好きなんですよ!」と翔太君が2・3歳頃のエピソードを思い出したように語り始めた。「ちょうどこだわりが強いときだったから」と振り返り、高速道路を走行中、翔太君が県境の看板を見逃して大泣きしたという出来事を話した。「(高速道路であり) 戻りようがないし。ごねられようが、もう何も(方法が) なくて。すごくそのときに怒った記憶があって。(中略) 嫌なこだわりだなんてすごく思ったことがあって。」と語った。地図や鉄道のやりとりは、母にとって【苦労につながる執着】でもあった。そして対話を続けていく中で、母は、「こだわりが強くて困るのは、私が勝手に困ってただけなのかなって、今なら思うんですけど。」と考えながら話した。私が、当時の出来事を詳しく尋ねると、母は、看板の前で必ず立ち止まらなくてはいけないことが億劫だったのかもしれないと振り返りつつ、「何かにこだわってるっていうのを、私が気になってただけなのかな。」と語った。地図や鉄道のやりとりは、母にとって、【今、振り返って見方を変えてみれば問題ではないこと】となっていた。

翔太君が広汎性発達障がいと診断を受けたことについて、母は、「診断名って覆らないんですってね」と話して涙ぐみ、「こだわりって言われれば、こういうの(地図・鉄道への関心)も、勿論こだわりだ

から、広汎性発達障がいになるのかな？とは思いますが、学校の様子とかみると全然。こだわりっていうよりも衝動性、多動性の方が強いから。」と語った。地図・鉄道のやりとりは、母にとって困難や苦労である時期もあり、診断が納得できる説明になったこともあった。一方で、診断による先入観に囚われることや、診断を受けたことへの迷い、変化する問題と診断名とのズレも感じていた。母にとって地図・鉄道のやりとりは、【腑に落ちる理解が見つからない混沌】でもあった。

母との対話では、地図・鉄道のやりとりは、節度を教えることで翔太君が他者と馴染めるようにし、常識とのあいだで苛立ちながら、地図・鉄道のやりとりについて納得できる理解を探していく物語として語られた。

3) 父の物語：対等に話し合いながら、翔太君の生き方を家族で考えていく物語

父は、翔太君にとって、地図・鉄道のやりとりという点において特別な存在であった。父は、翔太君にとって恒例のイベントとなったスタンプラリーのパートナーであり、「今日はどこへ行ったでしょう？」と話し合う相手であった。また翔太君と私の対話時（2014.9.21）、父と翔太君が外出先への乗り換え方について話し合う場面があり、その時、翔太君は興奮気味に乗り換えルートを説明し、父と翔太君は大きな声で笑い合っていた。そのため私は、「道順を考えることやスタンプラリーについて、父の気持ちを教えて欲しい（2014.10.27の対話の記録）」と考えていた。

スタンプラリーを始めたきっかけを尋ねると、父は「最初の頃って電車の音を嫌がってたのかな、確か。耳をふさいでたりしていたから。これちょっと大人になってから具合悪いなと思ったので。なるべく乗り慣れさせようと思って」「なるべくルールも知ってもらって。切符の買い方も知ってもらって。一人でも外に出られるようになったらいいなと思ったのが始まりだったです。」と語った。地図・鉄道のやりとりは、父にとって、【将来に向けて翔太君

ができることを広げていくこと】であった。また翔太君が楽しみにしていた家族旅行の計画について、父は、「出来れば母も付いて来られそうな所ないかと（翔太君に）言ったら、じゃあ温泉にしようとなって。最初は電車で行こうとしたんだけど、それはお母さんが来るんだったらダメだよと（母は電車移動では気疲れするため）。泊まった所から、一部だけ電車に乗るけど、（それで）いいかと言ったら、（翔太君が）いいよと言ったので。大体話し合っただけです。」と翔太君の要望だけでなく、家族全員が無理なく楽しむことができる計画を考えていることを語った。地図・鉄道のやりとりは、父にとって【家族全員が楽しめる計画を翔太君と立てること】でもあった。

父と翔太君の日課となっている「今日はどこへ行ったでしょう？」で始まるやりとりは、その日、父がどのように乗り継いで、どこに取材に行き、どこに立ち寄ったのか、という今日の出来事が語られるものであった。父は、「息子がそんなに喋る方じゃないので、（父が）会社でどうだったとかいう話をすると、（翔太君が）僕はこうだったと話をするから、（翔太君が）自分からなるべく言うように。俺は明日どこへ行くとか。どうだったこうだったと（話している）。」とやりとりへの想いを語った。母と私の対話でも、父と翔太君のこのやりとりについては語られていた。母は、「（翔太君に）学校でどうだったか？」と聞いてしまうけれど、学校ではシンドイこともあるので、父は学校の話はしないのだろう、と考えていた。地図・鉄道のやりとりは、父にとって、翔太君自身が話したいことを選びながら、【今日の出来事をお互いに伝え合う日常会話】であった。

父と翔太君のやりとりについて、母は、私と話す翔太君は「ちょっと自慢げ」であるが、「主人とは対等」なのだと語った（2014.10.27）。それで私は、父が翔太君とのやりとりにおいてどのようなスタンスであるのか気になった。また母との対話後、トンネル内での誕生会について「家族それぞれに想いが

表1. 家族ひとりひとりの物語

家族員 (参加時の年齢)	対話の状況		物語 と 【意味のまとまりにつけたカテゴリー】
	実施日	時間	
翔太君 (8歳)	2014.8.28 2014.9.21	76分 92分	楽しみや感動を共有しながら、相手への合わせ方を学んでいく物語 【計画づくりを一緒に楽しむこと】 【地図のなかにある発見を一緒に探す遊び】 【地図上に散りばめられた思い出を共感し合うこと】 【自分の気持ちに折り合いをつけながら楽しむこと】
母親 (37歳)	2014.10.27	100分	節度を教えながら、納得できる翔太君の理解を探していく物語 【けじめを教えること】 【生き生きと話す翔太君を可愛らしいと思うこと】 【許容範囲を広げつつ、節度をもって翔太君の要望を叶えていくこと】 【苦勞につながる執着】 【今、振り返って見方を変えてみれば問題ではないこと】 【腑に落ちる理解が見つからない混沌】
父親 (39歳)	2014.12.11	93分	対等に話し合いながら、翔太君の生き方を家族で考えていく物語 【将来に向けて翔太君ができることを広げていくこと】 【家族全員が楽しめる計画を翔太君と立てること】 【今日の出来事をお互いに伝え合う日常会話】 【翔太君をそのまま受けとめ、自分たち親子らしく対話を楽しむこと】 【翔太君と他者との付き合い方を探していくこと】

あるのではないかと(2014.10.27の対話の記録)」とも考えていた。父にトンネルでの誕生会について尋ねると、父は、計画した日にトンネルを通過できず残念だったという翔太君の気持ちと、翔太君の気持ちがわかっていてもわがままだと思う母の気持ちを推しはかりながら、この誕生会について話した。私から父に、なぜイライラしないのかと尋ねると、父は「普通じゃない事を考えるのが特徴なのかなと思っているから。まあそういうのをひっくるめて付き合いやるといふか、そうした方がいいんじゃないかなと私は思っているんです。」と語った。そして父は、翔太君との対話について、「私も楽しんでますし、息子も会話を楽しんでいると思います。思いつき気兼ねなくしゃべれるんじゃないですか。」と話した。地図・鉄道のやりとりは、父にとって、突拍子のないことを思いつく【翔太君をそのまま受けとめ、自分たち親子らしく対話を楽しむこと】であった。

地図・鉄道のやりとりは、翔太君との楽しみである一方、翔太君自身や周囲の人々に、翔太君の特徴をどう伝えていくかという迷いにもつながっていた。父は、翔太君に、苦手なこと、我慢の大切さ、周囲からの手助けを求める大切さを話して聞かせな

がらも、翔太君自身もみんなとの違いを「自覚しているんじゃないかな。」と言い、翔太君なりに仲間との関係の取り方を考えているのではないかと話した。そして、「今後、どうしたらいいのか、私も家内も悩んでる。障がい者という形での人生がいいのか、一番下でもいいから普通にやっていった方がいいのか。最後は本人に決めてもらおうと思っています。」と語った。私が、「迷われるのはなぜ？」と尋ねると、父は、翔太君の幸せや安心をどう考えるのか親として悩むこと、そして翔太君が普通にやりこなすかもしれないと思うときもあれば、それは見通しが甘いと思うときもある、という揺れる心境を語った。父にとって、地図・鉄道のやりとりは、その時の翔太君や母の想いを汲みながら、【翔太君と他者との付き合い方を探していくこと】でもあった。

地図・鉄道のやりとりにおける父と翔太君の対等な関係は、自分達らしい楽しみ方を共有しつつ、素直に思いを言え合える対等さであった。それは父が、翔太君の関心や楽しみ方を知ろうとし、そのままの翔太君を認め、生活のしにくさに一緒に取り組むことによって築かれたものであった。そして父は、翔太君の将来や、他者との関係の持ち方につい

て、翔太君と向き合い、母の想いを汲みながら考えていた。父と私の対話では、地図・鉄道のやりとりは、対等な関係でお互いに話し合い、翔太君がどのような自分として生きていくのかを探していく物語として語られた。

V. 考 察

本稿では地図・鉄道に関心を向けることに光を当て、私との対話で語られた家族ひとりひとりの物語を記述した。ここでは、ひとつのことに向けた関心についての家族ひとりひとりの物語を知り、多声的な物語として家族を理解することが、家族看護活動にどのように役立ち、私たち支援者の意識にどのように関わるのかを考察する。

1. 多声的な物語として家族を理解する意義

家族ひとりひとりが語った物語はそれぞれ異なり、家族には、語られなくては知ることができない多様な物語があった。地図・鉄道のやりとりは、子どもにとっては、楽しみや感動を共有しながら、相手への合わせ方を学んでいく物語であり、母親にとっては、節度を教えながら、納得できる子どもの理解を探していく物語であり、父親にとっては、対等に話し合いながら、子どもの生き方を家族と一緒に考えていく物語であった。これらの家族ひとりひとりの物語が重なり合うなかに、“家族が、その子の自分らしさを育みながら、他者との関係の中でのその子の生き方を探していく”という家族としての物語が浮かびあがってくる。多声的な物語として家族を理解することにより、ひとつのことに向けた関心は、こだわりというモノローグではなく、家族ひとりひとりの物語が関わり合い、重なり合うことで家族としての物語をつくっていくダイアログとして理解することができる。

本稿では、物語が重なり合う多声的な物語として家族を理解することを提案する。ひとつのことに向けた関心には多声的な物語があり、物語が重なり合うことが家族の物語をつくるとする理解は、これま

での先行研究や、当事者が報告したこだわりの理解の仕方とは異なる。前述したように、これまで多くの先行研究が、ひとつのことに向けた関心について、子どもの話題を柔軟にするという支援を提案してきた。これに加え、家族への看護活動では、問題や課題の解消だけではなく、その出来事を経て家族が得る価値や強みも視野に入れている。多声的な物語として家族を理解することは、家族ひとりひとりの物語を見つめ、物語の重なり合いのなかに家族としての考え方を見出すことを助ける。本稿において紹介したひとりひとりの物語は、互いに補完的であり、物語同士は関わり合いながら語られていた。例えば、母親が語った節度を教えていく物語と、父親が語った他者との生き方を考えていく物語は、どちらも子どもの社会性を育てるという点から重要な役割を持っており、互いに相手の物語があるからこそ子どもを養育するという家族の機能が果たされていた。多声的な物語として家族を理解することは、問題を解決するという理解だけではなく、その家族が、ひとつのことに向けた関心にどのように向き合い、お互いの物語がどう支え合っているのか、物語が重なり合うなかに家族としてのどのような考え方があるのか、という物語と物語の円環的な関係からも家族を理解することを助ける。これまで提案された子どもの関心を柔軟にするという関わりに加え、物語と物語の重なり合いにより充実する家族としての力にも焦点を当てることができる。と考える。

また家族の多声的な物語を理解しようとする対話は、家族自身が自分たち家族のことを考える機会をつくる。対話において、それぞれの家族員は、他の家族員の想いや考えを推しはかりながら自身の物語を語っていた。他の家族員の想いや考えに関心を向けながら自分の物語を語ることは、自分の物語と相手の物語の関わり合いを意識させ、他の家族員の想いや考えと関連させて自分の物語を語ることを促す。多声的な対話を重視するオープンダイアログでは、対話において、話すことと聞くことを分けることで自分の内的対話を活発にする (Seikkula,

Arnkil/高木, 岡田, 2016) ことや, メンバー相互の異なった視点が接続されることが重要(斎藤, 2015)とされている。このことから, 他者の語りと自分の語りの関わり合いに気づく重要さは裏付けられる。物語が多声的になることを重視した対話は, それぞれの家族員が物語と物語の関わり合いに気づき, 他の家族員への理解と自分たち家族について理解を深めることに役立つと考える。

2. 多声的な物語を理解する専門性

支援者として子どもや家族と話し合うとき, ひとつのことに向けた関心は, こだわりという困り事の物語として語られやすく, 家族も困り事の解決を求めて語る。そのため, こだわりを守りながら, 他者との関係から出てくることばを育む(樋口, 吉岡, 2006)など, 子どもや家族の視点に立ち, 困難さの物語に寄り添って解決を目指すことは, 支援者に求められる重要な使命である。加えて, 家族が持つ力を信じ, その力を発揮した家族らしい生活を支えることも看護の重要な役割である。家族というユニットが看護の対象となるとき, こだわりという困り事の物語としての理解だけではなく, 困り事以外の物語にも関心を向けることが必要になる。しかし家族との対話において関心の向け方を変えていく支援者のあり方は, これまでほとんど議論されていない。

本稿では, 多声的な物語として家族を理解するためには, 多声的な物語に関心を移すことのできる専門性が求められることを提案する。対話では, セラピスト自身が, 自分の先入観に働きかけることから始まる対話的な過程の中で, セラピストとクライエントの両者に新しい意味が芽生える(Anderson, Goolishian/野口, 野村, 1997)とされ, そのために支援者には, 物事への新しい理解が開かれる対話としての話し合いができる専門性(Seikkula, Arnkil/高木, 岡田, 2016)が求められる。家族との対話では, 困り事を解決しようとする関心から, 多声的な物語として家族を理解しようとする関心へと家族の見方を広げていくことが必要となる。多声的な物語として家族を理解しようすることは, 困り事

の解決を目指すというこれまでの支援者の役割, 対話でのスタンス, 支援のあり方に留まらず, 支援者自身がオルタナティブな理解を探そうとすることでもある。対話では支援者も変化の主体であり, その対話において, 支援者もまた相手を理解する支援者自身の考え方を問い直している(山本, 浅野, 2018)。家族との対話では, 知らず知らずのうちに捉われていく困り事というドミナントな物語に気づき, その家族を多声的な物語として理解するオルタナティブな物語へと関心を広げることが必要である。対話という家族への看護活動においては, 多声的な物語にも関心を広げ, 対話における支援者のスタンスや役割を変えていくことのできる柔軟な専門性が求められると考える。

3. 限界と今後の展望

本稿では, ひとつのことに向けた関心として, 地図・鉄道への関心を取り上げ, ある家族について物語を記述し, 多声的な物語として家族を理解することの意義を述べた。多声的な物語としての家族の理解がどんな時に有効であるのか, そして, 実践現場において, 問題の解消を目指す支援と多声的な物語として理解していく支援の両立がどのように可能であるのかについては, 今後検討が必要である。

VI. 結 論

本稿は, ある家族を取り上げ, ひとつのことに向けた関心を家族ひとりひとりの物語として記述することにより, 家族のあいだの理解を多義的に提示するとともに, 多声的な物語として家族を理解する意義を提案することを目的とし, 質的記述的研究を行った。地図・鉄道に関心を向けたやりとりには, 多声的な物語があり, 家族ひとりひとりの物語は関係し合いながら語られた。地図・鉄道について語ることは, 家族ひとりひとりが, 相手の想いを汲み取りながら自分の家族について語ることによって, 家族としての物語をつくっていくことであった。

多声的な物語として家族を理解することは, 多様

な物語が関わり合うことがどのように家族を支え、物語が重なり合うなかにもどのような家族としての考えがあるのか、という円環的な視点から家族を理解することを助ける。そして、支援者には、家族の多声的な物語に関心を向け、対話におけるスタンスや役割を変えていくことのできる柔軟な専門性が求められると考える。

謝 辞

本研究にご参加くださいましたご家族の皆様にご心よりお礼申し上げます。また分析過程においてディスカッションしていただいた名古屋大学大学院医学系研究科浅野みどり教授、浅野ゼミの皆さまに深く感謝いたします。

本稿は、日本家族看護学会第24回学術集会以て報告した内容に、加筆・修正を加えたものです。また本稿は、JSPS 科研費JP26861930、JP16K20794の助成を受けて実施した研究の一部です。

著者の貢献

MYは、研究の構想およびデザイン、データ収集、データ分析・解釈、論文の作成の研究プロセス全体に貢献した。

〔受付 '18.10.10〕
〔採用 '19.02.06〕

文 献

Anderson, H., Goolishian, H. / 野口裕二, 野村直樹, クライアントこそ専門家である—セラピーにおける無知のアプローチ, (McNamee, S., Gergen, J. K.), ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践, 59-88, 金剛出版, 東京, 1997

Anderson H., Goolishian H., 野村直樹: 協働するナラティブ—ゲーリションとアンダーソンによる論文「言語システムとしてのヒューマンシステム」, 51-52, 遠見書房, 東京, 2013

海老名園恵, 齊藤美沙紀: 自閉症児とのコミュニケーションの方法について, 保育研究, 43: 134-140, 2005

Flick, U. / 小田博志, 山本則子, 春日 常他, 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論, 211-218, 春秋社, 東京, 2002

Friedman, M. M. / 野嶋佐由美: 家族看護学 理論とアセスメント, 123-125, へるす出版, 東京, 1993

東田直樹: 自閉症の僕が飛びはねる理由 会話のできない中学生がつづる内なる心, 92-99, エスコアール出版, 千葉, 2007

樋口玲子, 吉岡恒生: 早期療育としての自閉症児への音楽療法—対人関係性の発達論的視点から—, 治療教育学研究, 26: 47-56, 2006

本田秀夫, 日戸由刈: 自閉症スペクトラムの子のソーシャルスキルを育てる本 思春期編, 52-53, 講談社, 東京, 2016

Kleinman, A. / 江口重幸, 五木田紳, 上野豪志: 病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学, 誠信書房, 東京, 1996

小島賢子, 谷田恵美子, 屋敷久美他: 自閉症スペクトラム児の食行動支援に向けた研究, インターナショナルNursing Care Research, 7(2): 51-60, 2008

宮川充司: アメリカ精神医学会の改訂診断基準DSM-5 神経発達障害と知的障害, 自閉症スペクトラム障害, 椋山女学園大学教育学部紀要, 7: 65-78, 2014

森岡正芳: 語りと騙りの間を活かす—セラピーの場—, (金井壽宏, 森岡正芳, 高井俊次, 中西真知子), 語りと騙りの間 羅生門的現実と人間のレスポンスビリティ, 23-37, ナカニシヤ出版, 京都, 2009

難波寿和: 14歳からの発達障害サバイバルブックス—発達障害者&支援者として伝えたいこと—, 30-31, 62-63, 学苑社, 東京, 2016

野口裕二: 物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ—, 16-22, 医学書院, 東京, 2002

野村直樹: 無知のアプローチとは何か—拝啓セラピスト様—, (小森康永, 野口裕二, 野村直樹), ナラティブ・セラピーの世界, 167-186, 日本評論社, 東京, 1999

奥村幸子: こだわりと常同行動, (日本自閉症協会), 自閉症ガイドブックシリーズ1乳幼児編, 70-71, 日本自閉症協会, 東京, 2001

斎藤 環: オープンダイアログとは何か, 39, 医学書院, 東京, 2015

佐久間尋子, 廣瀬幸美, 藤田千春他: 自閉症スペクトラム障害をもつ幼児の食事に関する母親の認識とその対処, 日本小児看護学会誌, 22(2): 61-67, 2013

Seikkula, J., Arnkil, E. T. / 高木俊介, 岡田 愛, オープンダイアログ: 19, 66, 日本評論社, 東京, 2016

高橋摩理, 大岡貴史, 内海明美他: 自閉症スペクトラム児の摂食機能の検討, 小児歯科学雑誌, 50(1): 36-42, 2012

十一元三: DSM-5と精神病理学DSM-5の「自閉症スペクトラム障害」概念とその病理が示唆するもの, 臨床精神病理, 35(2): 199-204, 2014

内田雅子: 事例研究法における認識論的課題, 看護研究, 46(2): 117-125, 2013

宇佐美政英: こだわり, 強迫, 反復行為を見分ける, 精神科治療学, 29(6): 735-740, 2014

渡辺慶一郎, 金生由紀子: 高機能自閉症の二次障害, (五十嵐隆, 平岩幹夫), 小児科臨床ピクシス2発達障害の理解と対応 (改訂第2版), 56-59, 中山書店, 東京, 2014

やまだようこ: 人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学—, (やまだようこ), 人生を物語る—生成のライフストーリー—, 1-38, ミネルヴァ書房, 京都, 2000

山本真実, 浅野みどり: 子どもの見方を変えていくしなやかさ—療育教室に参加する母親と看護者との対話を通じた協働的な学び—, 日本看護研究学会誌, 41(5): 863-874,

2018
山本 力：研究法としての事例研究. (山本 力, 鶴田和
美), 心理臨床家のための「事例研究」の進め方, 14-29,

北大路書房, 京都, 2001
Yin, K. R./近藤公彦, 新装版ケーススタディの方法 (第2
版): 14, 54-57, 千倉書房, 東京, 2011.

Understanding a Family as Polyphonic Stories: A Family of Three Creates Three Different Stories from a Single Topic

Mami Yamamoto¹⁾

1) Gifu College of Nursing

Key words: Narrative, Dialogue, Polyphony, Rashomon-like reality, Autism Spectrum Disorder

The purpose of the paper is to describe how various stories could be generated from a child's interest in one thing, and to suggest the significance of understanding family through polyphonic stories made by the family members. A qualitative and descriptive study using the narrative method was conducted on a family with a child with autism spectrum disorder (ASD).

The child with ASD and his parents created three different stories from a family conversation on maps and railways - the child's favorite topic. Through such conversation, the child learned to communicate with others while sharing his emotional experiences including joy, happiness, etc. The same kind of conversation gave his mother opportunities to understand him more profoundly while teaching him how to behave himself. On the other hand, the father enjoyed the conversation as an opportunity to talk to his child as an equal individual. Though the conversation the family thought together about how the child should live in society. The family created polyphonic stories while cooperating unconsciously, based on profound consideration and affection for each other.

Understanding a family through polyphonic stories, not only help us to solve some problems but also allows us to understand the family in terms of how the overlapping stories provoke various thoughts within the family.